

平成 28 年度第 2 回兵庫県立図書館協議会 会議録

1 日時及び場所

平成 29 年 3 月 17 日（金） 14:00～16:00

2 出席者

協議会委員 尼川委員 廣岡委員 石堂委員 岩木委員 尾崎委員
児玉委員 笹井委員 多田委員 野田委員 渡邊委員

教委事務局 社会教育課 前川副課長

県立図書館 善部館長 田中次長 杉谷総務課長
谷利用サービス課長 井上ふるさと・資料課長

3 議事

(1) 平成 28 年度事業実績について

次長より資料 1 に沿って平成 28 年度の事業実績を報告

○委員の質問・意見と図書館の説明

- (委員) 県立図書館は、県立高校に向けても取り組んでおられることがわかるが、地元の図書館を利用して気になっていることがある。県立高校と地元の市町立図書館との連携が難しいと地元図書館の方から聞いたことがあり、市町立図書館が県立高校と連携して何か取り組むというのは難しいものなのだろうか。やろうと思えばできるのでは？高校生が大学生になるときに本離れがおきやすく、そのタイミングで「地元の図書館を使おう」と高校生に働きかけることは大事な取組みでないかと思う。地元の市町立図書館が市町立小中学校に対して何かを取組むことに比べて県立学校は敷居が高いような意識があると聞いたが、どうだろうか。
- (委員) ご指摘のとおり、組織として図書館は、教育委員会の所管であり、神戸市では図書館で小中学校の先生方や学校図書館司書の方の研修も行なっており、そういった意味で小中との連携はあるが、高等学校とは少ない。高校生もよく来られているが、それは、連携ということではなく、図書館本来の利用、勉強のために来られているような場合が多いようである。
- (図書館) 制度的な難点はない。私どもも説明させていただいた中にありましたように、神戸市立の高校に依頼を受けて行くこともあり、高校と地元の図書館とが話し合っただけならば可能だと思う。
- (委員) 今年で言いますと、丹有地区の学校図書館司書の研修として、丹波市の図書館が行なう研修に参加した。それも、学校図書館司書と地元図書館との連携のひとつと言えると思う。生徒についても、かつて西脇市内の県立高校に勤務していた際には、「市立図書館にはこういった本がある」、といった関心付ける授業も行なった。学校によっては、求めるような本が図書館にあるかどうかによって、授業で図書館を使うことには難点があるかもしれないが、図書館利用の導入的なことは可能で、学校により現に行なっているところもある。
- (委員) 県内の高校は市立もあるが大半が県立で、県立なら県教委の管轄という思考になり、そうすると、視野の中になかなか地元の図書館が入りにくいのではないかと思う。県立図書館は、学校サポート事業などで色々な高校に行かれていますので、そういった時に、県立図書館から高校側が地元図書館に目を向けるよう意識づけるような投げかけを行なっているとはどうか。
- (委員) 高校が直接的に、ボランティアとして図書委員が、市町立図書館や小中学校へ行って読み聞かせをするなどの取組みを行なっており、教育委員会の枠を超えて直接図書館と関係を結んでいる。かなりの県立学校で地元の図書館や市町立学校へ行く傾向はあるが、直接なので、表（おもて）に見えにくい部分がある。
- (図書館) 選書の関係であるが、県立図書館では「学校サポート」ということで学校に向けてのセット貸出しを行なっており、学校の授業のニーズに合うよう現在は 111 セット作っている。セットに合うよう、当館の選書方針にやや外れるところがあっても用意するようにし

ている。

(委員) これからは、図書館が色々なところと連携していくこと、特に県立は範囲が広いのでどう連携できるかを探っていくということが大事である。

レファレンスに力を入れていることが報告からもよくわかるが、大事なことで、県立図書館は人材もあり調べることができる十分な資料もあるので、これを事業としてやっていくべき。

レファレンスの件数があまりあがっていないが、統計のとり方として、来館者からのもの、電話によるもの、メールによるものの3本立てのうち、どれが多いのか、といった分析が大切。また、相手の年代、職業等といったレファレンスの統計を丁寧にとっていくことにより確実に利用を引き出していくことになる。

3月18日に実施予定の「レファレンス体験をしよう」もよい試みだが、PRが弱い。レファレンスは、図書館サービスの中で最も知られていないものなので、ニーズを引き出していくことをとことんやっつけていかなければ、サービスにつながっていかない。レファレンスを受ける側には強いニーズ、解決したい何かがある。そうすると、「レファレンスを受けてみませんか？」というフレーズでは弱い。アピールの方法、例えば、参加しようとする人にとって、有料か無料かは関心があることなので「無料」であることや、レファレンスでこんなことを解決できたといったことを明示するなど、広報に力をいれる必要があるのでは？

(図書館) 前回の協議会より、ホームページのトップページに数秒ごとに数種のレファレンスの例を表示できるようにしていたが、その無料ソフトの期限が切れたため使えなくなり、現在はバナーをクリックしてもらえれば例示がでるようにしている状態である。指摘はもっともで今後も工夫していく。

(委員) 例示の内容も、難しい質問、多くの人は聞かないだろうといったことではなく、易しい言い方や質問例を表示してニーズを引き出す広報が大事。

(委員) 出前講座でいなみ野学園大学院に行かれていたが、これは、いなみ野学園からの申込みがあったものか？

(図書館) そうです。

(委員) 最近、高齢者大学というものがたくさんあり、市町で行なっているものも含めて、今、地域課題にアプローチさせようとするスタンスのものが多いが、その解決までの手段として図書館がどれだけ利用されているだろうか？あまり利用されていないのではないか。インターネットで調べるだけで終りになっていることも多い。

高齢者大学のカリキュラムを組む時期に図書館がこういうものを提供できます、といった営業をかけ、講座を必ず担当できるようにすれば、図書館に親しむ人の幅が広がることになるのではないか。明らかに図書館を使う必要がある人はいるが、そこに関わっていないのではないか。待っていると、こういうことを図書館がしていることを知らないままの人が多い。

(図書館) いなみ野学園からは、一昨年、来館してもらい事業内容について説明させて頂き、来年度も予約が入っている。これからもつながりを大事にしていきたい。

(委員) 資料2ページ(資料1(2))にある阪神淡路大震災関連のデータベースは継続追加しているのか？一定の期間で切った資料なのか？

(図書館) 現在、記事情報の追加はできていない。

(2) 平成28年度第1回協議会での意見・提言への対応について

次長より資料2に沿って平成28年度第1回協議会での意見・提言へ対応を報告

(委員) 資料収集予算が補正でついたのは良かった。

(委員) 図書館が努力しているのはよくわかるが、講座等への参加者が少ない時があるのはなぜだろう。他の機関、組織とつながった時は、参加者も多い。今は、つながることが不可欠。単独でやるのは難しい。どこかにつながってやることがお互いのためになるので、積極的に考えていくべき。

子育て期の保護者自身の読書体験を提供すること、市町図書館では親に対する学びの場の提供機会を作ろうとすることが多くなっている。

25年の親子読書活動を行ってきた経験の中で、子が成長していくと色々な問題も起こるようになってくる。10歳離れた兄弟をもつある母親が、下の子の保育園が月に1回実施する保護者向けの園長による絵本講座で救われたというケースがあった。子ではなく親を対象とした読書の機会、親子だけでなく、親自身のストレスの緩和、「育ち」「癒やし」の為の読書の機会を提供することも考えてはどうか。

(委 員) 親世代や高齢者を対象とした読み聞かせのニーズがある。県立図書館は、読み手を育てることも考えていかなければならないかもしれない。

(委 員) 高校への出前講座が多く実施されているのはよいと思う。今年度は、高校生インターンシップの受け入れはなかったとのことだが、今まではあったのか？

(図 書 館) ありました。

(委 員) タイムリーに今現在の来館者を増やすことも必要だが、10年20年先を見据え、高校が生徒を呼び寄せる手段として小学生向けにPRするように、来館者を増やす方法として、将来的に来館者となる世代である小中の総合学習や高校の課題研究といった授業の中で連携すれば、1年を通じて来館してもらうことができる。こちらでは、県庁インターンシップとして行なわれているが、市町内、地元で行なっているものもある。夏休みだけではなく違う時期にも実施することも考えてはどうか。

(図 書 館) 貴重な意見を頂戴した。連携が大事との話をいただいたが、高校とのつながりは、比較的順調に推移しているとは思いますが、まだまだ開拓の余地があり色々な窓口を探して拡大していきたい。

(3) 活性化方策 自己評価について

次長より資料3に沿って活性化方策 自己評価について報告

(委 員) 平成26年8月に策定された活性化方策は、重点の3本の柱から成っているが、どれも重要な柱であると改めて思う。自己評価は色々で、▲評価のものは、これからの課題になるろう。

特に、「ふるさとひょうご何でも図書館」は、県立図書館のコレクションに関する部分で、一番大事で期待が大きいところである。郷土のことなら何でもわかる、自分の祖先のことを調べようと思えば、県立図書館に行けば調べられるという状態にする、という構えでコレクションしておくことが必要になると思う。

デジタル化にかかる項目については、神戸大学での震災文庫のデータ収集から立ち上げを担当された委員もおられるが、どう思われるか。

(委 員) デジタル化が進んでいない点は残念である。二十数年前に震災文庫を作ろうと立ち上げた際は、神戸大学は地理的に便利なところとは言いがたく、直接の来館者は少ないということもありインターネット黎明期中、デジタル化を進めていった。

仮設図書館になって、来館者数が減少しているというのは致し方ないこととは思いますが、耐震工事後明石公園内に戻り、利用者が元に戻ればいいのか、というと、県立図書館は、県民全体を対象とするもので、直接、県民が来館するには多額の交通費がかかる方の多いことも考えると、むしろ非来館者へのサービスが大切で、出前講座等に力を入れているのはよいことと思う。図書館で講座をやって人が集まらないことは仕方ない部分もあり、むしろ外の人の集まりやすいところに行く、連携するということが必要。学校との連携についても、高校生に対して、「県立図書館」そのものでなくても「図書館」に興味を持ってもらえるようにすれば、その役目は十分に果たしていることになると思う。その点では、もちろん施設は大事で、ふるさと兵庫の資料が全て揃っている、ワンストップで見られることができるということも必要だが、一方で、ホームページ整備やデジタル化は、現在の仮設図書館であっても変わらずできることであり進めるべきではないだろうか。

(委 員) デジタル化は、資金の調達が問題になる。県予算だけでなく、他の助成団体等からも助成金を獲得する働きかけをする等、目的がはっきりしているので少しずつでもできることやからやっていくべき。県の中でだけ予算を待っていても、▲評価はずっと▲のまままだと思う。色々なファンドを活用してみてもどうか？県立図書館ではそうすることは難しいのだろうか？

(図 書 館) 予算の受入れにはかなり手続きは必要になると思う。国立国会図書館では、著作権処理が完了したのから順次デジタル化を行っており、それとの連携を進めていくこと、ま

た、資料保存のためにも徐々にでも進めていきたい。

活性化方策の1(7)(8)項目については、書籍化されていない地域活動等のアーカイブの作成についてであるが、これは、地域住民が「地域でこういった活動をしたい」と考えた際にその情報を提供することを目指す、ということだが、これには各地域行政からの地域活動に関する情報収集が不可欠である。ただ、行政側の図書館に対する理解もいまひとつ進んでおらず、そういった情報を集める体制を図書館から整えていくことが現状では難しいため、▲評価となっている。

(委員) 県立でも市町立でも図書館は人手、お金ともに集めることが難しいが、図書館がホームページやデータベースを活用しているということアピールする必要があるのでは？色々な取組みをしているが、頭打ちになっているのではないかと思う。限られた(予算の)中で実施する事業を共有していくという意味でも、県と市町立が連携していくこと、ホームページでも相互にリンクを貼って情報を共有し、相乗効果により図書館の認知を高めていくことが大事だと思う。若い人たちは、地元の図書館のホームページの中で県立のバナーをクリックして情報を得たり興味を持ったりする。小さなことから初めていけばいいのでは。

(図書館) ホームページのトップページの掲示方法の問題かもしれないが、県内の図書館間では、一定の相互リンクは進め、本の横断検索もできる状態にある。

(委員) どの県立図書館でも横断検索ができることは当たり前になってきているが、もう一步進めた連携が必要だと思う。

(4) 平成29年度事業計画について

次長より資料4に沿って平成29年度事業計画について報告

(委員) 図書館を多く利用するリタイア世代としては、週に3回ほど利用している。リタイアすると世間から離れる一方で気がつくことも多く、日常生活の問題のほぼ全てが市役所に行けば解決するが、現役時代はそんなことは考えもしなかった。図書館に行けば、だいたいのが手に入ると思う。レファレンスのことが先ほどから話にあがっており、事例を見ていると、かなり専門的なことを勉強したいと思っている人が多いようだが、実際問題としてレファレンスの件数が現状より増えた場合、対応は可能なのか？

(図書館) 最近、レファレンス件数は減少している傾向であるが、最も件数が多かった時期でも対応できていた。場合によってはお待ち頂くこともあるが、基本的には対応できないことはない。

(委員) これ以上増えても対応できるなら、レファレンスという分野のことを知らない人が多いので、もっとPRしてはどうか？私自身、市役所があればほど便利なところとは、退職してから知った。図書館にこれほどのデータベースがあり知識の宝庫であることを知らないままの人が多と思う。

色々な企画をされているが、私もリタイア後は、何かおもしろいものはないかとチラシに目を通したりする中、人間とはおかしなもので、1つだけ興味があってもなかなか行こうと思わないが、2つ興味が重なれば、時間と交通費がかかっても是非行きたいと思う人が多いと思う。いろいろなところと、コラボしてはどうか？

地元の図書館で弁当が食べられる部屋がありそこで勉強する学生や懸命に絵本を探す子育て中の母親の姿をみると、もう少しリタイア世代も勉強せねばと思う。

(委員) 老人会として図書館で読み聞かせ活動をしている人は、ボランティアをしつつ、孫世代と接したり声を出すことで元気をもらえるといった相互方向で効果があるとの声もある。

(委員) 地元の図書館では、年に1回くらい館の中で夕刻6時頃から音楽会をひらき満席になっているところもあり、図書館の役割について考えることがある。各図書館で色々工夫されている。

(委員) デジタル化がいわれているが、私はアナログな考えだが、図書館はやはり来てもらわないと意味がないと思う。足を踏み入れてドアを開けて入ってもらうことで、こんなものがあったのか、といった新たな発見があるはず。来て頂く工夫をしなければならぬ。

読書活動のことも話題にあがったが、自分は、読み聞かせにはあまり賛成ではない。それは、読み聞かせる本が、世間で人気があるから、他の人が推薦しているからという理由で選ばれ、読み手が理解不足であれば、ほとんど感動がないからである。最近の児童文学

は昔のおとぎ話と違い内容もテーマもかなり小説に近く現代社会をとらえている作品が多いが意外とそのことは知られておらず、ただ読んで「おもしろかった」で終わってしまっているのは残念。

親が勉強することには賛成で、自身も読書会をしてくれませんか、との声をいただくが、自身は読書会も好まない。それは参加者が本を読んでこないことが多いからである。ただ、大人を対象とした絵本の読書会は盛況で長く続いたものがあった。なぜなら、絵本は字が大きくその場ですぐに読め、絵もついているからである。孫がいる世代の方も「色々なことを知りたい」という気持ちからか大勢の参加があり、ほとんどの方が事前に読んでこられ、そうでない場合もその場ですぐ読めるため、その読書会は長く続いた。ただおもしろいですね、で終わるのではなく、さらに飛躍してなぜこの本が読まれているのかといった社会の構図にまで考えることができ、祖父母、父親母親の子どもへのかかわりに影響がでてくると思う。

(委員) 読書推進活動を推進する担い手を養成する活動もやることもあるが、その際に、こういった視点は大事になってくる。

(委員) 難しいことではあるが、耐震化工事終了後、元の場所へ戻るのをきっかけに、いま一度、県立図書館の立ち位置を考えなければならない。一般の図書館と同じ感覚で来館者数の増加を目指しては成り立たない。むしろある意味で、数字にこだわらず、元の「図書館の図書館」という立ち位置をとるよう評価軸を変えてはどうか？今後の方向を定める、立ち位置を見直すよい時期ではないか。

元の「図書館の図書館」から離れたのは、明石市立図書館と隣接していたことから、貸出しへの要望がありそれに対応するためであったが、明石市立と離ればその要望も消えることになる。そうなれば、もちろん来館者への対応は必要だが、評価軸を「図書館の図書館」に戻してウエイトを置いて事業を行ない、来館者数を増やすことは後回しに考えてもよいかと思う。

(図書館) 兵庫県立図書館は全国の中で歴史が非常に浅い。昭和 49 年設立時には、市町立図書館との役割分担を考えて「図書館の図書館」という市町立の補完機能を担うことを目的として始まっている。ただ、中途半端な位置づけともいえるので、数字にとらわれていると無料の公共貸本屋になってしまう。それではダメだという意識を持っており、図書館の生い立ちを考えたらうで県立らしい取組みを目指していきたいと常々考えていた。今いただいた提案を受けて、方向転換と言うよりは、従来の「図書館の図書館」という位置づけによって、明石公園に戻った際、事業の見直しや活性化方策についても項目削除も含め考え直していく。

(委員) 工事の完了まで時間的に余裕があるので、その間に、どういう図書館として今後運営していくのか、戻った時に場所の移転だけでなく対外的に県立図書館の考え方を発信するような事業の実施を考えておくべき。